

畑中暁来雄詩集『資本主義万歳』

新時代の風刺精神と詩情

佐相 憲一

一

資本主義万歳？いきなりのこのアイロニーだ。

格差社会とアジア平和危機に行動する詩人のこころが痛切だ。昨今、第二次世界大戦やアジア近現代史をねじ曲げる輩が跋扈したり、庶民のふところは寒くても株価が上がると経済上向きなどと報道される。そうした問題をユニークな切り口で暴き、時にユーモラスに風刺しているのがこの詩集だ。「権力やマスコミに流されやすい日本人、黙って耐えるのが美德」、そういった嘆きを吹き飛ばす力を本書はもっている。

二

第一章「アジアの中で」十三篇は、アジア友好と戦争直視、平和の思いの詩群である。冒頭の詩「青島にて」を全文引用しよう。

青島にて

「日本も中国にいいことしたのだなあ」／／日本人観光客がつぶやいた／／海の見える丘の上／青島ビール工場の展示館にて／「アサヒビール工場」時代の白黒写真を見て／日本人男性は驚嘆したのだ／第一次世界大戦／日本帝国は／一九一四年八月 ドイツに宣戦し／十一月には青島を攻略した／「日本もいいことをした」／／中国人女性ガイドの方へ私の目を向ける／彼女の笑顔の下に／ひきつった抵抗の炎の素顔が覗く／そして涼しい瞳の奥に／中国侵略／虐殺された曾祖父のDNAが／阿修羅のように渦巻いていた／／窓の外へ目をやれば／青島の黄昏の海が／ドクドク グザグザと鳴って

いた

日本でも人気の青島ビールの青島工場で、ある日本人観客がつぶやいた何気ない一言「日本もいいことをしたのだなあ」の重大さを、日本軍に虐殺された曾祖父をもつ中国人女性ガイドの表情によって語らせている。作者の主観を書かずに場面を忠実に再現する中に、日本人観光客の無神経ぶりと中国人女性の怒りの炎がくつきりと浮かび上がる。

終連〈窓の外に目をやれば／青島の黄昏の海が／ドクドクグザグザと鳴っていた〉という表現には、作者の心が中国人女性側に立っていることがうかがわれる。

漢詩を好み、中国語を習って何度も中国を訪れている作者だが、それが観察眼に生きている。この詩で作者はカメラの役に徹しているが、現地の人間と実際にふれあってその感情を体感しているからこそ、この何気ない場面に深い傷を感じとることができたのだ。短い中に本質的なものを鋭く表現している。

詩「平頂山殉難同胞遺骨館」では侵略日本軍に殺された中国人のドクロに見つめられる。資料をもとにしながらか冷静な筆致で刻まれる戦時の想像。〈目をそらしたくなるが／「歴史」が私をつかんで放さない〉という詩人の視点は確かである。

ここから三篇は、韓国に近い対馬に関する詩群だ。

詩「散骨」は著名な劇作家であった故・つかこうへい氏を対馬で追悼しながら、ペンネームにこめられた在日コリアンの深い願いなどに思いをはせる。

詩「雨森芳洲の墓」は江戸時代に朝鮮通信使と交流した〈平和の外交官〉を刻印する。このような人物こそが日本の宝なのだという作者の世界観が行間から熱く伝わってくる。

詩「清水山城跡を登る」では対馬の古城を訪れた作者が豊臣秀吉の朝鮮侵略軍を想像している。

詩「握手」では韓国ソウルでの路上交流を刻む。この時、実は私もいっしょに旅していたのだが、路上でボランティア活動をしているあちらのクリスチャンに畑中さんは新鮮な共感を覚えたらしく、それまでは韓国の人々との片言のコミュニケーションはもっぱら私の役目だったのに、この時は畑中さんがすつと前に出て、この詩にある片言交流を笑顔いっぱいにしたのだ。その時の感動を平和憲法への思いも織り交ぜながら新鮮

に書いている。

ここからは平和をめぐる日本の危険な現状がリアルに描かれた詩群が続く。

詩「気象通報」はドキッとさせられる。「戦争を放棄した国の気象通報」とはどうてい思えない。日米軍の危険な訓練である。

詩「戦争に行きたい」はタイトルからしてギョツとする。戦争関連法案に反対する署名を路上で集める作者に対して一人の若者がそう言ったのだ。それをめぐる作者の苦悩がリアルである。世相を反映したその若者の言葉に傷つきながら、それでも作者は「青年の本当の良心を信頼して」署名活動を続けるのだ。

詩「脱走兵」は作者自身が戦争に行かされる悪夢である。この想像にはユーモアが入っているので読者はニヤリともさせられるが、笑いながら笑えないリアルな実感がある。この戦争への生理的恐怖は、世界中の脱走兵にあるだろう。

詩「死の商人のブギウギ」は戦争産業のからくりをとらえたブラックユーモア。この軽さがたまらなくニクイ。政治経済の闇を構造的に把握する強固な眼に裏付けられた作品である。

詩「靖国神社に星条旗、万歳」はこの国のタブーに挑む。いま問題になっているテーマだが、作者の眼は一步奥まで鋭く見つめる。右翼的な流れの靖国にアジアの悲しみを踏みにじってこたわる輩は、実は戦前の鬼畜米英とは裏腹に、戦後の日米安保体制を通じて星条旗アメリカへの従属をも推進してきたのだ。

詩『『東京裁判』』“万歳”と・・・」は昭和天皇の欺瞞を面白く鋭く風刺している。

サイパンで戦死した日本兵の無念を刻んだ詩「サイパンの陽炎」で第一章は終わる。

いま改憲だの国防軍創設だの集団的自衛権だのとさまざまに国民を言いくるめて日本を再び戦争のできる国にしようとする動きが盛んである。畑中さんがずっと詩に書き、行動してきた反戦平和・アジア友好の心が重要になっている。妥協なしに事実をとらえて歴史を展望するこれらの詩群に、平和を願う人々は強く励まされるだろう。

三

第二章「冰山」十篇は、格差社会と化した新自由主義経済な

る弱肉強食社会の実態を描き、高度に発達した資本主義の矛盾に迫る詩群である。

詩「ケータイ屋の看板娘」は、行きつけの焼き鳥屋での友人男女との会話だ。若い女性は「ケータイ屋の看板娘」だが、正社員になれるのに泣いている。苛酷な売り上げノルマが課せられているのだ。人情味ある会話に深刻な労働実態が浮き彫りになる。その辛酸をあざ笑うように広告では女性タレントが「ケータイで毎日がもつとクリエイティブ」と呼びかける。

詩「氷山」は「所持品は九十円」など若い労働者たちのパレードを描く。ひとりでも入れる労働組合（ユニオン）につどう人々は、派遣労働など非正規雇用者も多い。氷山の崩壊を止めろ／若者ユニオンの鋭角の刃は／ヘッジファンドの喉元を刺す」と比喩された闘いが続く。

詩「食ふべき自衛隊」を全文引用しよう。

食ふべき自衛隊

JR神戸駅の広告掲示板に突如出現した／バックがブルーの大広告／キャッチフレーズは／「GO!GO!PEACE!」
／モデルはモーニング娘。／／バッチリ青年男子の心を掴んだね／スポンサーの防衛庁・自衛隊さん／／大卒就職率は五十五%まで落ち込み／青年の十人に一人が失業者／四百七万人の「フリーター」／来る日も 来る日も 来る日も 職探し／やっと思つた派遣会社は／二週間ぶつ通して仕事をしたあと／二ヶ月間もの「自宅待機」／そして最後通牒¹¹／
／魂も奪われ職を求めてフラついていた青年は／巨大広告に青天からの一筋の閃光を見た／「ああ これ飯が食える」
／（おお！神よ¹² ↓変換↓狼よ¹³）「影の声」／／街中のあちこちで モー娘。が微笑む／あちこちで青年達が振り返り／
広告ポスターに「夢」を抱く／／「GO!GO!PEACE!
E!」／（平和のためのイラク派兵かな？）／「まあいいや、食べていけるのなら」／命と引き替えの／（食ふべき自衛隊）

自衛隊の大広告が風刺されている。アメリカ軍といっしょに世界の戦地に出かけ始めた自衛隊のキャッチコピーが「GO!GO!PEACE!」ということ自体が皮肉だが、アイドルタ

レントを使って演出される自衛隊勧誘に若者が吸い寄せられる背景が鮮明に暴露される。改憲や軍拡をむき出しの資本主義経済が煽っているのだ。巧妙なからくりに皮肉たっぷりの作品だ。

詩「トック大臣」は風刺の笑いが冴えている。「医療特区」の掛け声で市民医療を企業原理にゆだねてしまう首長の様子が暴露されるが、ことあるごとに「特区」と言う首長の習性を逆手に取った（トック）の響きをお笑いの精神で風刺している。

詩「鬱が降る」は、現代の働く人の鬱の思いをリズムカルに皮肉たっぷりにつづっていて、笑うに笑えない切実性に胸が痛む。サービス残業を厳格に規制する法律のない日本では、基本的に経営者側の資本の論理が強い。（ウツ ウツ ウツと雨が降る）（ザンギョ ザンギョと鐘が鳴る）実態が辛い。

詩「資本主義万歳」を全文引用しよう。

資本主義万歳

ボクは生きています／毎日 ご飯が食べられます／毎日 お風呂に入られます／資本主義のおかげです／ボクは生きています／住む家があります／履く靴を買います／資本主義のおかげです／ボクは生きています／イヴサンローランのコートを持っています／トヨタの自動車に乗っています／資本主義のおかげです／ボクは生きています／仕事が忙しいです／睡眠時間は三時間です／資本主義のおかげです／ボクは生きています／会社が残業代を払いません／闘う労働組合に相談に行きます／資本主義のおかげです／ボクは生きています／会社が思想調査をします／会社のスパイが尾行をします／資本主義のおかげです／ボクは生きています／生きづらい世の中です／働いている人の三人に一人は非正規雇用です／若者の十人に一人は完全失業者です／統合失調症にもなります／資本主義のおかげです／万歳¹¹

これまでのすべての怒り、苦しみ、悲しみ、失意、悔しさをこめて体当たりした詩集タイトル作品である。人生経験と観察と学習を通して現代日本の社会構造の本質を見抜いた作者にとって、批判のあり方も深化せざるをえなかった。批判対象の側から展開しながらアイロニーを利かせる言葉には裏側が感じら

れ、逆説は痛々しくも鋭く社会矛盾の深部に突き刺さる。

詩「一葉の写真——七年前の記憶」と詩「四角い物体」の二篇は阪神淡路大震災の記憶から表現された。詩集あとがきによると、作者が本格的に詩と向き合ったのは一九九五年の阪神淡路大震災に遭遇してからだ。兵庫県西宮に住む作者はたまたま生きのびたが、ほんのちよつとした偶然の力で、死者は自分だったかもしれないという衝撃が、社会に対してものを書く原動力となったのだろう。「四角い物体」には、一昨年の三・一一も連想させる臨場感がある。

詩「国会議員は一人、万歳」もタイムリーな作品だ。巨額の軍事費などにメスを入れず財政難だから議員数を減らせという保守政治家のキャンペーンは為政者への反対勢力を切るためのものである。アメリカの二大政党制や日本の戦前の大政翼賛会のように、システム根幹への批判を殺されてはたまらない。そうした議員削減の動きを、作者は面白おかしい風刺詩にした。どんだん数を削っていった結果、ついに二名だけになり、さらには一人になったというのは文学ならではの想定だが、大げさなようでいて、その課程の論理は現在の国会状況を反映している。〈二人〉は「二党」を連想させる。与党も野党も慣れ合いで国民不在の権力構造の矛盾が風刺されているのだ。ついに一人になって疲労感に初めて後悔するというのは茶目つけのある物語だが、遊び心をもって鋭く風刺されているのは国会議員削減の現実の矛盾である。

詩「マスコミに捧げる挽歌ならびに少しの期待」は、タイトルからして共感を呼びそうだ。現在の大手新聞とテレビ放送のあり方には大きな批判が国民各層から出されているが、権力寄りになって、スポンサー大企業に気兼ねする記事は切れ味が悪い。漢詩マニアである作者らしい漢字四字熟語を駆使してユニークに展開される。「挽歌」とはキツイイ審判だが、「少しの期待」とあることに最後の救いを感じてもらって、マスコミ諸氏は反省して出直してもらいたいものだ。

四

第三章「雨だれ」八篇は、さりげないアヴァンギャルドや作者の人柄がにじむナイーブな心象など、違った魅力がひろがる。

第一章、第二章で鋭く面白く風刺詩を開拓した作者の実人物は、穏やかではにかみがちな人である。その政治詩の鋭さに作者像を想像する方々は、直接会うと驚かれるだろう。この第三章にしみじみとひろがる抒情の世界には、傷だらけになりながら人々の幸せと夢を追い求めてきた人の涙が見えてせつない。

詩「雨だれ」は、大阪で私が代表を務めていた詩誌「すきっぷ現詩人」に発表されたものである。ビジュアル詩の手法も使って淡々と描く雨だれの余韻のニュアンスは読み手に委ねられている。俳句の味わいに近いかもしれない。

詩「東尋坊を烏賊が飛ぶ」は、私が編集長をしていた大阪詩人会議「軸」に発表された作品で、福井詩人会議「水脈」の秋の詩の合宿に呼ばれて共に過ごした折に着想されたものである。東尋坊に近い福井三国の宿の朝、畑中さんは晩に見た夢を私に聞かせてくれた。それが詩の原形になっている。その不思議な風景には畑中さんならではの感覚があつて、それを詩に書くように私は強くすすめたのだ。

東尋坊を烏賊が飛ぶ

東尋坊を烏賊が飛ぶ／青い宇宙を烏賊が飛ぶ／くるり　くるり
くるり／赤い目玉が　パチパチ　チカチカ／身体を青く
光らせて／青天井を烏賊が飛ぶ／赤ん坊の高見順の聞いた
／荒磯の波も／今日は穏やかな青い海／天にそびえる黒い岩
／絶壁には波の音／ひたり　ひたり　ひたり／白波が黒い淵
を愛撫する／／暗い淵から／青い空を見上げては／少女たち
の軽やかな声が流れていく／青天井を眺める井の中の蛙／絶
壁の黄色い花は／高嶺の花／もがいても　もがいても／二
匹の蝶は／我が眼前を過ぎるのみ／／東尋坊に烏賊が飛ぶ／
ニュートンの法則に逆らつて／水平線と十文字に／白い烏賊
がくるりと飛ぶ

海に飛ぶ烏賊の幻想的な色彩から始まり、先達詩人・高見順のことも交えながら、実際の風景と交錯してひろがる心象は苦しい。二匹の蝶は／我が眼前を過ぎるのみには人生の疎外感も感じる。〈ニュートンの法則に逆らつて／水平線と十文字に〉飛ぶ烏賊には、作者の内なる握りこぶしが投影されているかもし

れない。読む側にも人生のさまさまにうまくいかないことの連想と、美しく幻想的な北陸の海の情景が重ね合わせられて、それぞれに味わえる作品となっている。

詩「秋雨」では、〈鬱病の私〉が駅のホームで自死の一步手前で踏みとどまる。

散文詩「二十五年ぶりのラブレター」は、高校の頃の片思いの相手に向けてつづられた手紙の形をとっている。ほほえましく、ほろ苦い。

詩「ある結婚式で」は、当事者ではない第三者の視点から、娘を嫁がせる父親の心境の矛盾をユーモラスに分析している。

詩「昨日の僕と明日の僕」は、たたみかけるリズムで自分自身の半生を振り返っている。あまり幸福そうには見えないし、けっこうみじめだ。だが、そこにはそうやってポロポロになりながら頑張って生きてきたんだという思いもあるだろう。後半は明日からのイメージがユニークな物を通して描かれる。読書好きの作者ならではの大著群がほほえましい。終連〈昨日の僕と明日の僕／今日もドシャ降りの雨／まあ 明日は晴れるだろう〉は、いまを生きる多くの人々の願いにも通じるだろう。

詩「紀勢本線阿田和駅」には、作者の郷里である三重県南部の海の地方に父の墓参りをした時のことが味わい深く描かれている。豊かな詩情に情景が目には浮かぶ。

詩集最後は散文詩「列車に手を振る子どもたちへ」である。

列車に手を振る子どもたちへ

走り行く列車の中から、ふと外を眺めると小さな子どもたち

が数人、こちらを見ながら手を振っていた。私も子どものころ、通り過ぎる電車に手を振っていた。鈴鹿山脈を背にして走る黄色い近鉄特急。青い稲の穂。

J Rの長い貨物列車に、また旅行客でにぎわう新快速列車に手を振る子どもたち。君たちは何を考えて列車に手を振るのだろう。遠い未知の世界への憧れなの。それとも過ぎ去り行く者への哀しみ惜しむ気持ちからなの。子どもの夢を乗せて列車は通り過ぎていく。

走り去る列車にむける君たちの夢とはいったい何なの。

「大きくなったら電車の運転手さんになりたい」

「お父さんといっしょに遠くへ旅行したい」

そんな君たちの夢を想像しつつ、私は列車の窓から微笑みかえしているのだよ。

電車に手を振るこどもたち。これから生きる彼らへの視線は優しい。生きにくい時代だからこそ、荒波にもまれるこれからのこどもたちへのメッセージは温かい。手を振るこどもたちの素朴な夢を大切にして、作者は願いをこめて微笑みかえす。

こうして詩集は終わる。

戦争とアジア平和友好、格差社会の苦しみと闘い、情景の中の心象や人生の思い。切実な現代の書だ。

新時代の風刺精神と詩情を、ひろく多くの人々のところに届けたい。